

武士道思想における死生観に関する一考察

——「下剋上」を中心に——

A consideration about the view of life and death in Bushido thought:
Focusing on “retainer supplanting his lord”

高瀬 武志

桐蔭横浜大学法学部

(2016年9月29日 受理)

1. はじめに

武士道研究を概観すると、日本史に沿った時間軸で史的諸相を念頭におきながら、その変遷を明確にする研究が大半を占める。これを「時代的特殊性」に着目した研究といえる。本論は「時代的特殊性」に着目しながらも、新たに「立場的特殊性」にも着目しようとする点にオリジナリティーがある。

研究方法は、一部考古学的手法を用いる場合があるが、基本的には研究対象である時代や人物の諸相・思想をあらわしている文献から内容や行間を読みとる、いわゆる文献学的手法を用いる。本研究で取り扱う文献史料や参考文献、先行研究の妥当性はその都度、本論の中で述べることとする。

2. 武士の起源と武士論について

武士の出現や起源については諸説あるが、福島氏が「律令制の下では、奈良時代は弾正台・衛府・京職、平安時代初期に検非違使が加わり、京内の警察活動を行い、地方では国

司・郡司が治安の維持にあたった。ところが、平安中期以降、律令制が動揺し、国家による治安維持活動が弛緩してきたため、盗賊や群盗がおこった。そこで、地方豪族や有力農民は自ら開発した所領を守るために武装し、そこから武士が発生した¹⁾」と指摘している説がこれまでの武士論の通説であった。これは「在地領主」＝「武士」という発生形態を起源とする説である。しかし、近年では以上に述べたような武士の起源の捉え方は見直され「職能的武士論」という新しい学説が通説となっている。これは高橋氏の研究²⁾に詳しい。つまり、初期の武士は五衛府などを中心とする武官や「瀧口」とよばれる宮中の警護を任されていたが、やがて内裏の警護をした近衛府を中心とする武官に武器や武具が継承され、その中で、「惣領」を中心に「家子」とよばれる一族の集団やさらに下に「家人・郎等」といった集団が集まるようになっていく。こうして形成された集団が武士団とよばれるようになる。この武士団が有力な貴族らの下に集まると大武士団へと規模が拡大していく。このような大武士団の棟梁を務めたのが、桓武天皇の系統を汲む桓武平氏や清和天皇の系

統を汲む清和源氏である。後にこの源平二氏が武士の時代を築く。以上に述べたような説が新しい武士の起源として捉え直されている。

源平二氏を中心とする「軍事貴族」としての武士が誕生し、天皇をはじめ、有力貴族らは武士に宮中の警護や地方の治安維持・反乱の鎮圧を任ずるようになる。こうして武士は徐々に武力と軍事的経験を蓄えると同時に、貴族が中心であった社会の中で存在感を増大させ、アイデンティティーの確立をはかる。なかでも特に勢力を拡大したのが河内源氏と伊勢平氏であった。朝廷内の権力抗争が発端となり、保元の乱（1156）と平治の乱（1159）が勃発し、武士が時代の表舞台へと躍進する。これは以下に記す『愚管抄』にみられる著名な一節からも理解できる。

「保元元年七月二日鳥羽院ウセサセ給テ後、日本國ノ亂逆ト云コトハヲコリテ後、ムサノ世ニナリニケルナリ³⁾」(傍点筆者)

以上に述べた記述のみをもって中世＝武士の世とは一概に定義づけることは諸処に問題を孕んでいるが、武士が世の表舞台へと進出し、貴族階層に匹敵する勢力を身に付けたことは見逃せない歴史的事実であると理解できる。

3. 武士の精神文化形成における 時代的特徴

武士の時代といえば、一般的に源頼朝が鎌倉幕府を開き、本格的な武士政権を樹立した1192年頃から江戸幕府第十五代将軍・徳川慶喜が大政奉還をする1867年までを指すことが多いが、実際の歴史的状况をふまえると平清盛が太政大臣になって、権力を掌握した時代までも含めた約700年近くの期間を指して、さほど問題ないと思われる。この武士の時代を概観すると、戦国時代ほどではないにしても、度々「下剋上」が成立し、政権が代わり、武士社会のトップが代わっている。こ

こで注目されることは、武士社会のトップが代わると武士の思想さらには武士道の性格が変化するということである。

まず、平清盛を中心とする伊勢平氏が武士社会のトップに君臨した時代は、平氏が貴族化したことにも影響すると考えられるが、武士道の性格としては「雅」や「静」という観念がみられる。これは平知盛の最期が例として挙げられる。源平の合戦において、平家の運命が尽きたと感じた知盛は、見苦しいものは海に投げ入れ、最後は平家の没落を見届けてから静かに自身の死を受け入れて入水する。やや主観的になるが、度重なる源平争乱の合戦を通して激烈な生への希求を表す「動」的心性と、それら全てが叶わぬと悟り諦めたときの空しいほどの「静」的心性が読み取れる。ここに「もののあわれ」・「無常」といった情感を求めることができる。死生観の特徴として「無常に対する悲哀」と死までも華麗に飾ろうとする「雅」の観念が挙げられる。これらを劇的にまとめたものが琵琶法師の語った「諸行無常」「盛者必衰」の理を示した『平家物語』である。

次に、平氏を打倒し本格的な武士政権を樹立したのが源頼朝である。頼朝は河内源氏の流れを汲む武士である。この河内源氏に代表される武士道の性格として「勇猛」という観念がみられる。また、坂東武者ノ習の土台となるものである。この時代から一時期、桓武平氏の流れを汲む北条氏が執権として政権のトップにつくも、室町幕府の滅亡までは足利氏も含めて河内源氏の流れを汲む武士政権が続くこととなる。河内源氏を棟梁とする東国武士にみられる「死」の捉え方、死に様は今井四郎の最期が例として挙げられる。それは以下に記す文章からも理解できる。

「今井四郎いくさしけるが、是をきゝ、『いまはたれをかばはんとてかいくさをばすべき。是を見給へ、東国の殿原、日本一の甲の者の自害する手本』とて、太刀のさきを口に含み、馬よりさかさまにとび落、

つらぬかてぞうせにける⁴⁾」

以上に記した引用文からも理解できるように、東国武士は自身の最期を名誉あるものにするために、ただ自害するだけではなく、他の者には真似できないような可能な限り勇ましい死に方、死に様を遂げようとする。特徴として、東国武士の「勇猛」に死を飾ろうとするさまが看取される。

さらに、南北朝期から室町期にかけては、武士团组织内の結びつきから、個人の名誉や先祖の名誉だけでなく、一族の「未来の為」にどのような死を遂げ、飾るかといった、従来にはみられなかった死への「期待的」観念がみてとれる。これは以下に記す記述からも理解できる。

「輕レ死重レ名者ヲコソ人トハ申セ。誰々モ爰ニテ討死シテ、名ヲ子孫ニ残サント被ニ思定一候へ⁵⁾」

「命ヲ惜ムモノノ為也。汝一國ノ主ト成テ榮花ヲ子孫ニ及サバ、我命全ク不レ可レ惜。早く其弓ヲ引其矢ヲ放テ我ヲ射殺シ、報國ノ賞ニ預レ⁶⁾」

以上のように、武士社会のトップが代わると、武士道的性格にも多少の異同がみられる。また、死生観にも変化がみられることが理解できる。以上が武士の精神文化形成における時代的特徴である。

4. 武士の精神的独立

武士の精神的独立の特徴としてあげられるのが「下剋上」である。

「下剋上」とは、辞書的に解釈すると「下位の者が上位の者の地位や権力をおかすこと。南北朝時代からの下層階級台頭の社会風潮をいい、室町中期から戦国時代にかけて特に激しくなった⁷⁾」という風潮である。簡潔に述べると「従来の権威・秩序を否定すること

⁸⁾」であるといえる。この観念・風潮が戦国時代の武士の思想を考察するうえでのキーワードとしてあげられる。

「下剋上」とは、個人だけでは成立しない。必ず集団で形成されるものである。つまり、他者との連関が非常に深く関係してくるといえる。相良氏はこの関係を以下のように指摘している。

「下剋上を企てる人間には必ず仲間があった。彼がその力を頼みにして企てる配下があったのである。下剋上を企てる武士にも配下があったという事実を認めれば、下剋上を企てる武士が、同時に下剋上の対象となり、ねらわれる武士であったことも理解されてくる⁹⁾」

以上の指摘から、下剋上を企てる武士というのは、他者の命を脅かす者であると同時に、一方では自身もまた他者から命を脅かされる対象であったことが理解できる。この追い、追われる関係を打破するために、武士は自身が下剋上を企てる反面、下剋上をしのぐ術も磨く。ここに下剋上を企てる武士にみられる精神的二面性をみることができるといえる。相良氏は、この二面性について以下のように指摘している。

「下剋上の英雄はそれだけ下剋上をしのぐすべに通ずる者でもありえたのである¹⁰⁾」

「戦国時代を下剋上の時代というのはよい。しかしそれは、反面において、下剋上をしのぐ精神が形成された時代であることを十分にみとめた上でのことである¹¹⁾」

以上に述べた、下剋上を企てる武士の精神的二面性を踏まえうえて、他者との連関を考察すると、「恩義的結合」と「情誼的結合」の二つの型にわけられる。

先ず、「恩義的結合」にみられる主従の関係は、頼み頼まれる関係であり上位者と下位

者といった立場の違いはあるが、精神的には並立した関係である。これを如実に表しているのが、足利義昭と織田信長の関係であろう。この両者の間にある主従の関係は「恩」をもって形成される。

「恩義的結合」という主従の関係には、「利」を求める武士道と「義」を重んじる武士道の二面性が存在する。また、この両者は互いに対立しあう関係にある。

本論では、「恩義的結合」における「利」を求める武士の死生観を『甲陽軍鑑』『朝倉宗滴話記』にみられる「死」に関する記述を中心にアプローチする。また、「義」を重んじる武士の死生観を『北条記』『謙信家記』にみられる「死」に関する記述を中心にアプローチする。

次に、「情誼的結合」にみられる主従の関係は、御恩と奉公の関係であり主君から受けた恩に対して、家臣は献身的な奉公を譜代においておこなう絶対的上下関係が成立している。これを如実に表しているのが、徳川家康に仕えた三河武士の献身的奉公の姿であろう。この両者の間にある主従の関係は「情」をもって形成される。

「情誼的結合」という主従関係には、「一味同心」の武士道が存在する。本論では、「一味同心」の武士の死生観を『三河物語』にみられる「死」に関する記述を中心にアプローチする。

時代背景としては、戦国時代という従来の伝統的秩序は喪失した実力至上主義の風潮があげられる。この時代は絶えることのない合戦の中で、生と死が入り乱れる、まさに戦乱であった。この時代では、源平二氏の時代にみられるような戦場における美学というものはありえない。この時代にあるのは、いかにして相手を滅ぼし勝利を手に入れるか、という一念に尽きる。これは『朝倉宗滴話記』にみられる以下の記述からも理解できる。

「武者は犬ともいへ、畜生ともいへ、勝事が本にて候事¹²⁾」

以上の記述からも理解できるように、鎌倉時代以前の武士にみられるような、合戦において、全軍停止の中で一騎打ちを所望するような一種の力比べ的な観念はなく、いかなる形であっても勝利することを求める、至って殺伐とした観念がみてとれる。こうした特徴が、従来の権威からの武士の独立を示す精神的二面性として理解できる。

5. 戦国期武士における精神的結合形態の変化

まず、恩義的結合における、「利」を求める武士の死生観について触れる。

これを顕著に表しているものとして『朝倉宗滴話記』に以下の記述がみられる。

「武者は犬ともいへ、畜生ともいへ、勝事が本にて候事¹³⁾」

また、『甲陽軍鑑』にも以下のような記述がみられる。

「国持大将、人の国をうばひとり給ふこと、国に罪はなけれども、武士の道たる故にや¹⁴⁾」

以上に示した各記述から、合戦においてまずは、勝って名利を得ることが求められていることが理解できる。朝倉や武田といった下剋上を成功させ、戦国大名にまで成りあがった武士には、既存の古い権威や規則を利用はすれども、縛られることなく、貪欲なまでに「利」を求めていたことが理解できる。

しかし、「利」を求めるのと同時に「死の覚悟」も強調されて説かれていることに注目できる。これを顕著に窺えるものとして『甲陽軍鑑』にみられる記述を以下に記す。

「於二戦場一、聊不レ可レ為二未練一。呉子曰、必レ生則死。必レ死則生。

戦場に於て、聊未練をなすべからざる事。呉子に曰く、生を必ずするときんば死す。死を必ずするときんば生く¹⁵⁾」

以上の記述からも戦場において「生」への未練を抱かず、「死の覚悟」をもって戦うことが説かれている。このような記述は『甲陽軍鑑』の中で数多くみることができる。

よって、「利」を求める武士の「死」の捉え方には、戦国以前の武士にみられた「死の覚悟」が精神的な土台としてあり、その上に「名利」や「利」といったものを求めるようになったと考えられる。

このように「利」を求めるようになったのには、絶えない合戦において命の儚さや「生」と「死」が紙一重で常に身近に存在しており、「死」は逃れることのできないものとして理解されており、いずれ必ずくる「死」にどのような意味を見出すかといった精神的葛藤の中で、生に強く執着し、「利」を求めるようになったと考えられる。

次に、恩義的結合における「義」を求める武士の死生観について触れる。これを顕著に表しているものとして『北条記』に以下の記述がみられる。

「義を金石に比し。命を毫毛より軽むし¹⁶⁾」

「河越の城を取巻て責入々々。息をも継せず戦ける。城の中の籠る勢。義を重し命を軽し。一足も不引¹⁷⁾」

「昔は義の為に命を失ひ名を揚しに。今又欲の為に義をうしなひ名をけかす。是をも少も思はず。唯人の國をとらんとのみはかる。浅ましきとも愚かなり¹⁸⁾」

また、『謙信家記』にも以下のような記述がみられる。

「管領職ヲ景虎ニユツリ。上杉ノ名字ヲ

モ出シ。東国ヲモ不残貴公ニ宛行候間。我ハ上野一國ヲ隠居仕リ。誠カン色トケテソ宣。景虎是天ノアタクル處ト思ヒ。弓矢取ル身ノ面目。只此義ニ不過ト思召¹⁹⁾」

以上に記した記述からも理解できるように、『北条記』や『謙信家記』には「義」を重んじ、求める姿勢が顕著に窺える。また、利という欲を求める姿勢を浅ましく、愚かであると評している。ここに恩義的結合における「義」を重んじ、求める武士の死生観がみてとれる。これは、先に述べた「利」を求める武士の死生観とは大きく異なる特徴を有する。

では、恩義的結合からなる武士において「義」を重んじる武士の死生観として挙げられる特徴として以下のものが考えられる。

まず、「義」をたてる為ならば命を顧みないで戦う点が挙げられる。ここには、自己の命よりも主従間或は同盟間における「義」という観念に重きが置かれている。また、これは武士が最も重要視し、求めた後世における「名」にも通じる部分がみてとれる。

次に、「義」をたてる為ならば、その場の合戦における勝敗というのは二次的な事柄に過ぎず、「義」の為に戦ったかどうかが最優先される。これは『謙信家記』に記されている以下の記述からも理解できる。

「景虎セ涙ヲナカシ宣フヤウハ。扱ハ晴信後ノ勝ヲ肝要ニト思ハレル子細は。國ヲ多ク可取奥意也。誠晴信カシコキ大将ニテ候。亦我等ノ心底は。國ヲ取二モカマハス。後ノ勝二モカマハス。指懸リタル一戦ヲマワサヌヤウニト存候²⁰⁾」

以上の記述からも理解できるように、「義」のために戦ったのであれば、勝敗は関係なく評価され武士の面目は保たれるとするのがこの武士の立場の考え方であり「義」を重んじ、求める武士の死生観の特徴として以上の事柄が窺い知れる。また「死」の捉え方として、自身の命や勝敗における利を失ってでも

「義」に重きを置く姿勢がみられる。

次に、情誼的結合からなる武士の死生観における「一味同心」という観念について触れる。代表的文献史料として『三河物語』が挙げられる。

死生観の特徴として、自身や一族の命よりも主君との情誼的関係を重要視している点が挙げられる。これは以下の記述からも理解できる。

「アノ者共一類、女房共の一類の者共迄も、人より先に一命ヲ捨、御奉公申仕候らハント存知定申タリ²¹⁾」

「此君にハ妻子ヲ帰りみず、一命ヲ捨テ屍ヲ土上ニサラシ、山野ノケダ物に引チラサル、トテモ、何かハ惜シカランヤ²²⁾」

以上に示した『三河物語』にみられる記述から、主君に対する忠誠心の高さが顕著に窺い知れる。『三河物語』にみられるような武士というのは、譜代の家臣であり主君との情誼的結合はより強固なものであると考えられる。このような武士にとって、主君からの御恩に報いる為であれば、一命を顧みずむしろ積極的に命を投げ出してでも奉公をすることが求められており、その結果としての「死」というものはむしろ譜代の武士にとっての誉れであった。これは以下に記す『三河物語』にみられる記述からも理解できる。

「汝等共ハ久敷普代之者ナレバ、此先々の一類も多打死ヲシテ、信光・親忠・長親より 此方、勳功ヲ尽タル者ノ末々。殊更、汝等モ、度々之走り廻り、其名ヲ得タリト云共、我又少身ナレバ、カイガワシキ宛行モセザレ共、普代ナレバ、我タメに一命ヲ捨て走り廻リヲスル²³⁾」

また、情誼的結合からなる武士の「死」の捉え方の特徴として「追腹」を切るという習慣があげられる。「追腹」とは、主君の跡を

追って切腹をするという殉死である。これは情誼的結合からなる武士には極めて当然の行為とされ、亡き主君以外には仕えないという忠誠心の高さの表現と同時に、死後においても主君との主従関係は継続しているものと捉え死後の御供を積極的に望むものであるとされた。この考え方は『三河物語』にみられる以下の記述からも理解できる。

「我人追腹は爰なり。若君様ハ城にて御腹ヲ被レ成て、城に火ヲ懸サセ給エ。然共、聊爾に御腹ヲ切セ給ふナ。各、打死ヲ仕物ナラバ、敵方、城エ押寄て、二三の丸エ責入ラバ、其時、御腹被レ成候エ。其より内ハ、御腹は切給ふベカラズ。我等共ハ、トテモ追腹ヲ切申上バ、御城ヲ罷出、広処エ罷出、浮世之思ひ出に花々ト戮死に可レ仕。取誉ラレテ、此方彼方にて死スル物ナラバ、人モ追腹トハ申間敷。然共、何に御譜代ト申共、御慈悲・御情・御哀みモ御給ハズハ、其場、にて当座之死は仕候共、か様ニ妻子眷属ヲ捨て打死仕事、ヨモアラジ²⁴⁾」

以上の記述からも理解できるように、情誼的結合からなる武士の死生観は、至って感情的であり、これは主従間における深い信頼と尊敬・憧憬の念を含有したものであると考えられる。よって譜代の家臣になればなるほどにこの傾向は強くみられる。

また、このような主従関係には「一味同心」という観念が根底にあるものと考えられる。よって、情誼的結合からなる武士には「一味同心」という観念を根本としたうえで「御恩」に対する一命を顧みない献身的な「奉公」と残された一族の安泰と生活の加護といった一族の「未来への生」を約束する自身の死である。

以上に述べた事柄を踏まえて、戦国乱世にみる武士道の変化を下剋上の影響から考察してみると、「下剋上」における精神的二面性から三つの武士の立場を見出すに至った。また、これら三つの武士の立場にはそれぞれの

異なった死生観をみることが出来る。これは、和辻氏の指摘する武士道における「時代的特殊性」の一つであろうと考えられる。

従来の権威・秩序は下剋上の風潮とともに崩壊したが、武士道の思想は戦乱の世にあって、多種多様に変化・分化しながらも脈々と受け継がれてきていることが理解できる。また、武士の死生観にも「時代的特殊性」ともいえる変化があったことが窺い知れる。

以上に述べた、戦国乱世における武士道の変化と武士の死生観の変遷を下剋上における精神的二面性に着目しながら、鳥瞰図的にまとめると以下の図1のようになる。

6. おわりに

本論では、先行研究²⁵⁾を土台にしながら、「下剋上」をキーワードとして新たに武士の起源から論を起し、戦国乱世における武士の思想を中心に考察をおこなってきた。そして、「下剋上」における精神的二面性から三つの武士の立場を見出すことができた。また、和辻氏の指摘する武士道における「時代的特殊性」とは別に、本論では武士の立場による死生観の違いを指摘することができた。今後は、研究対象とする武士の幅を広げ、武士の

思想や死生観の根底を支える「宗教」との関わりについては新たな課題としたい。

【注】

- 1) 福島正樹『院政と武士の登場』日本中世の歴史2, 吉川弘文館, p.99, 2009.
- 2) 高橋昌明『武士の士像の創出』東京大学出版会, 1999.
- 3) 『愚管抄』巻第四, 日本古典文学大系 86, 岩波書店, p.206, 1967.
- 4) 『平家物語』下, 日本古典文学大系 32, 岩波書店, 1959.
- 5) 『太平記』二巻, 日本古典文学大系 35, 岩波書店, p.143, 1961.
- 6) 『太平記』三巻, 日本古典文学大系 35, 岩波書店, pp.219-220, 1961.
- 7) 新村出編『広辞苑』第五版, 岩波書店, p.830, 1998.
- 8) 相良亨『武士の思想』ペリカン社, p.17, 1984.
- 9) 相良亨『武士の思想』ペリカン社, p.16, 1984.
- 10) 相良亨『武士の思想』ペリカン社, p.16, 1984.
- 11) 相良亨『武士の思想』ペリカン社,

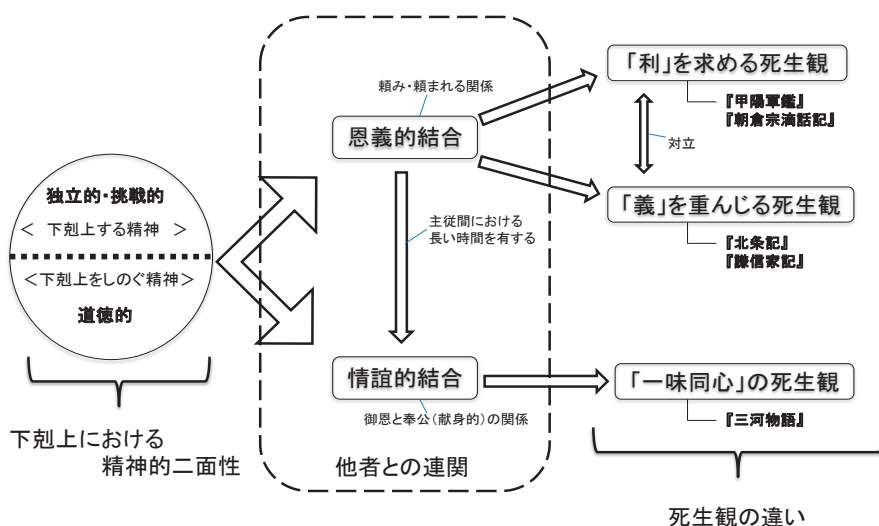


図1 「下剋上」を中心とする武士の死生観の変遷

- p.17, 1984.
- 12) 国書刊行会編『続々群書類従』第十, 平文社, p.2, 1969.
 - 13) 国書刊行会『続々群書類従』第十, 平文社, 1969.
 - 14) 磯貝正義・服部治則校注『甲陽軍鑑』人物従来社, p.7, 1966.
 - 15) 磯貝正義・服部治則校注『甲陽軍鑑』人物従来社, p.57, 1966.
 - 16) 塙保己一・太田藤四郎編『続群書類従』第二十一輯上, 続群書類従完成会, p.432, 1958.
 - 17) 塙保己一・太田藤四郎編『続群書類従』第二十一輯上, 続群書類従完成会, p.432, 1958.
 - 18) 塙保己一・太田藤四郎編『続群書類従』第二十一輯上, 続群書類従完成会, p.499, 1958.
 - 19) 塙保己一・太田藤四郎編『続群書類従』第二十一輯上, 続群書類従完成会, p.272, 1958.
 - 20) 塙保己一・太田藤四郎編『続群書類従』第二十一輯上, 続群書類従完成会, p.270, 1958.
 - 21) 斎木一馬・岡山泰四・相良 亨校注『三河物語 葉隠』岩波書店, p.20.
 - 22) 斎木一馬・岡山泰四・相良 亨校注『三河物語 葉隠』岩波書店, pp.28-29.
 - 23) 斎木一馬・岡山泰四・相良 亨校注『三河物語 葉隠』岩波書店, p.30.
 - 24) 斎木一馬・岡山泰四・相良亨校注『三河物語 葉隠』岩波書店, p.40.
 - 25) 高瀬武志・廣瀬伸良・中村充『武士道思想における死生観に関する一考察——「下剋上」の影響に着目して——』スポトロロジー学会においてポスター発表, 2012.